

福祉事業所とまちの条件

法政大学大学院
デザイン工学研究科建築学専攻
下吹越武人研究室

「発達障がい者にとって人間の条件とは」

三つの基本的な人間の活動力、すなわち労働、仕事、活動を意味する

ハンナ・アーレント

近年になって「発達障がい」という言葉を耳にする機会が多くなっており、徐々にそれが身近なものとなっているように感じる。

発達障がいとは対人を受け、個人での活動を好むことや自身の中でこだわりを強く持ち、アイデンティティが他者より表に現れやすいなどの特徴がある一方で、他者とのコミュニケーションが苦手だったり、自制することが複雑なために急に感情的になるなどほんの少しの感覚的な「ズレ」により社会から距離を置かれる存在とされてきた事例も少なくない。そして、それらは身体的なものとは異なり、外見に現れないものであることから他者に理解されることが難しいということが現状である。

人より少し「ズレ」があるという理由だけでなぜ「障害」として扱われ、社会から距離を置くように見えなければならぬ強いらなければならないのだろうか。

私はこれまで発達障がいという個性を持った人と近い環境で生活する機会が多かった。そのような私自身の境域から「発達障がい者にとっての活動力、すなわち労働、仕事、活動」とはという問いについて考えたいと思った。

隔離されてきた歴史的背景

・終生保護されたコロニー



・私宅監置



・孤児院、育児院、感化院



発達障がいに区分される以前、精神障がい者や知的障がい者は山奥の終生保護された大規模施設コロニー（敷地内に住宅、病院、学校、商店、農圃、作業場などを備えた障がい者が暮らす小さな村として計画されたもの）に保護され、家庭においては精神病院以外の場所でも拘束できる場所として監置室に設けられ詰め込まれたり、また孤児院、育児院、感化院に収容されるなど社会から隔離された生活を余儀なくされてきた背景がある。

隠されるように成り立つ障がいを抱えた人々の働く場「福祉事業所」

プライバシーの高い住宅を事業所に利用する



大きなポスターやブラインド、カーテンなどを使い、外から中の様子を隠す



柵や柵、花壇などを使い、はっきりとした境界を示す



テナントビルやマンションの上層部を事業所とし、街区との距離をとる

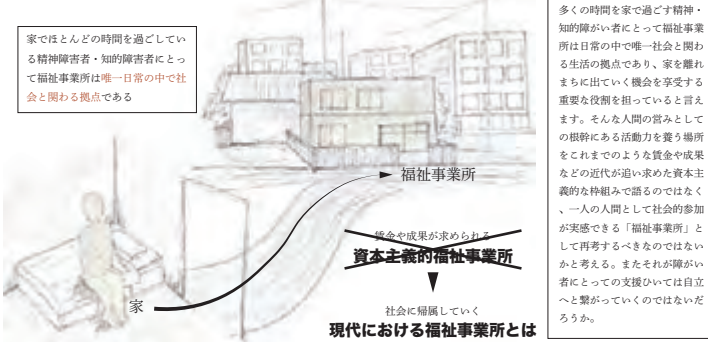


窓の少ない工場などが事業所として利用される



精神障がいや知的障がいを抱えた人々が生活する場が社会に対して隔離するよう風景は現代においても残されており、精神や知的に障がいに陥った人々が社会復帰を目指していくための働く場「福祉事業所」ではプライバシーの高い住宅を作業場として計画されていたり、ビルマンションの上層部に事業所を設置し街区との距離をとったりなどそこで働く人々の活動を隠すように成り立ってきた。

「障がいを抱えた人々」の働く場としての公共空間とは



福祉事業所への見学・対話による基礎調査



基礎調査として7カ所の福祉事業所、1カ所の特別支援学級へ見学に行き、支援員とそこで働く利用者との対話を行うとともに風景計画の平面計画とそこで作業内容を記録していった。福祉事業所の選定基準は川崎市を拠点とし、初めに見学し就労継続支援B型事業所から範囲を拡大していきながら選定していった。このような福祉事業所や特別学級では写真の撮影が制限しているところがあったため、スケッチによって記録することとした。

福祉事業所の今 見学対話による基礎調査から見てきたものを考察する

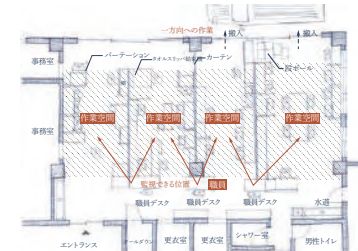
1. 施設型となった働く場（管理することが重視された構成）

就労継続支援B型事業所

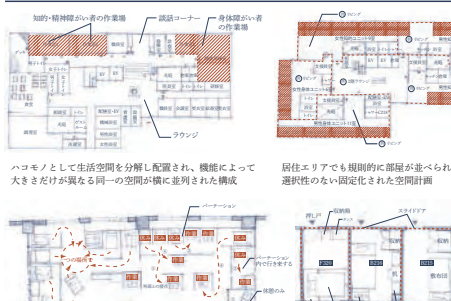


平面計画の観察より、働く人々は職員が管理が行き渡るように配置・方向が規則的に定められ、また規格化された同じボリュームが並列しそこが利用者たちの生活空間として成り立っており、自立し社会的参加を目指す場にも関わらず管理を重視したいわゆる施設型の構成になっている。

就労継続支援B型事業所/生活介護



障がい者入所施設/生活介護



作業空間はパーテーションによって区分され、作業場所・休憩場所ははっきりと分類され、また場所も固定化されている

2. 場所性からの乖離（立地や場所に対する文脈を一切持たない構成）



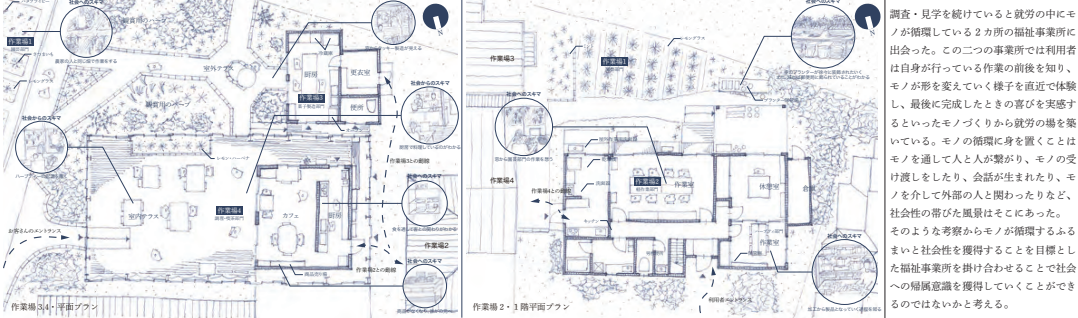
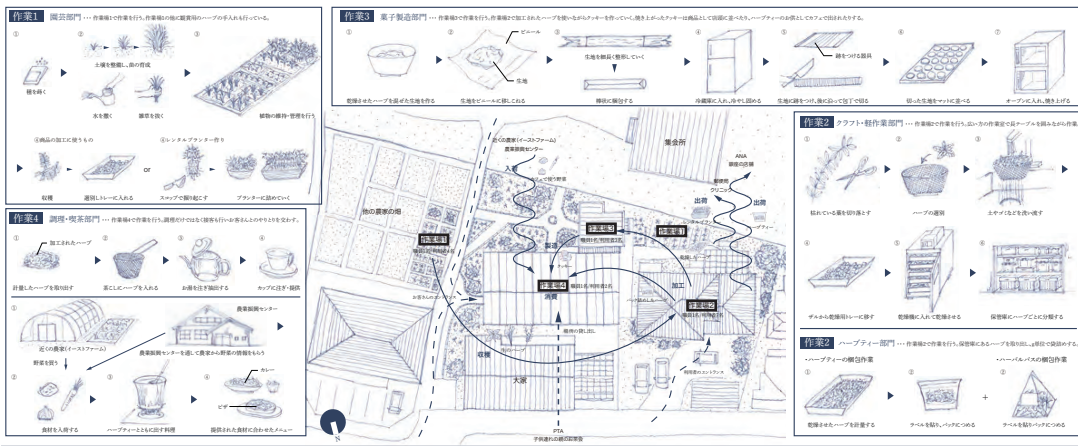
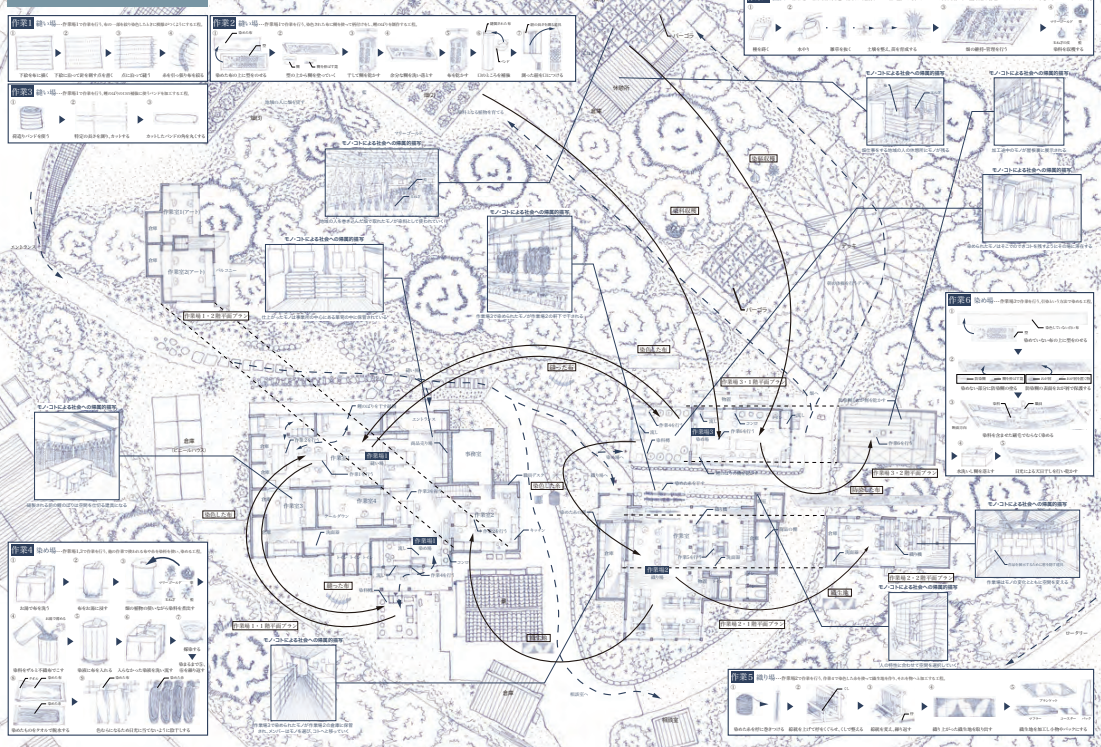
これまでの福祉事業所と現代における福祉事業所のあり方とは



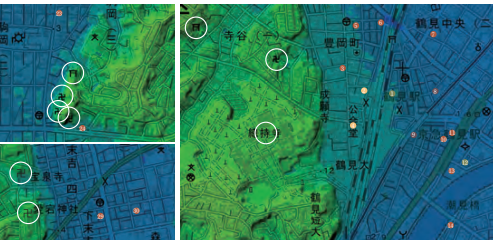
1. 社会への帰属意識
利用者の生活空間は管理することを第一に優先され、またそこで行われる作業は一連の工程の一部を切り取った軽作業であり、社会的なつながりが欠落していた。
2. 場所への帰属意識
福祉事業所は場所に対する意識が全くなく、場所を選ばずどこでも成立しており、まちに対して距離を置くよう外部との関わりを遮断するように計画されていた。

福祉事業所で行われている作業は車の一部の部品を組み立てたり、商品を梱包する箱を組み立てたりなど一連の工程の一部を切り取った作業がほとんどである。そのためモノが変化していく前後を知る余地がない軽作業は社会から切り離されるように単純作業として成立している。また、モノが変化していくことで獲得できる純粋なやりがいや喜びは制限され、社会性を失っているように思える。

モノが循環する福祉事業所



福祉事業所は丘下に計画された



起伏図に福祉事業所の位置と時間が堆積した寺社仏閣の位置をプロットすると寺社仏閣のプロットされたラインを境に丘下で福祉事業所が計画されてきたことがわかった。福祉事業所の見学より得られた施設型となつてしまった働く場の要因として近代に入り都市化が進められた丘下をベースに広がっていったことで場所と切り離された施設型となった働く場が生まれ出されてきたと言える。

丘下から丘上にかけて見えてくる資源



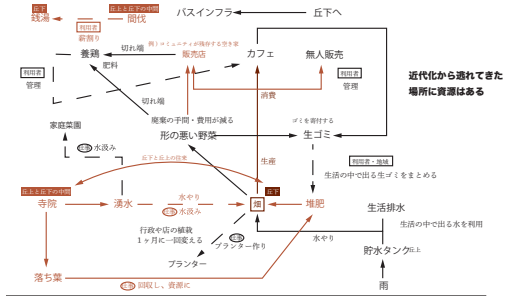
まちの分析を続けていると丘上から丘下にかけて地域特有の資源や場の使い方が根付いていることに気づき、地域の小さな資源はまちの中で循環していることがわかった。また、そこには地域特有の場の使い方も垣間見える場所性に富んでいる。

近代化から逃れてきた丘中

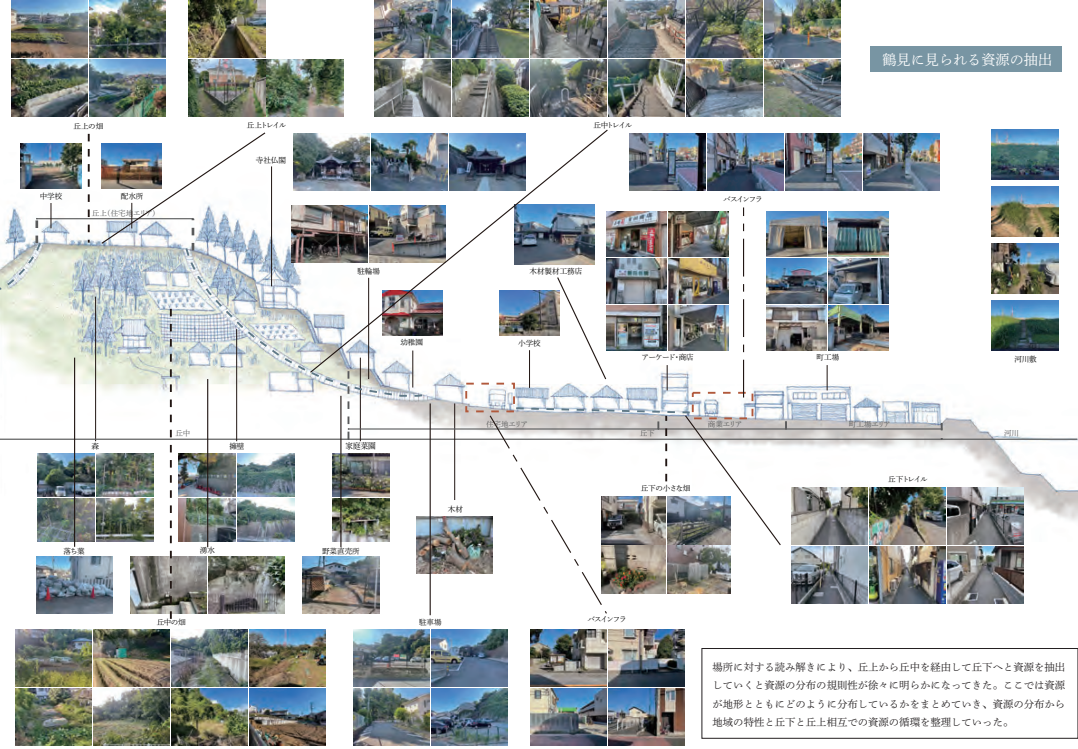


寺社仏閣をプロットしたラインを境に見ていくと丘上と丘下をつなぐ徒歩インフラが点在しており、土地に根付いたコンテクストが累積していることがわかった。このことから丘上と丘下をつなぐ丘中には丘下を基盤に進んできた近代化から逃れてきた場所なのではないかと考える。これまで近代化の進む丘下で展開されてきた福祉事業所は近代化から逃れてきた場所のある丘中と丘上のコンテクストを含めて読み解いていくことで施設型による枠組みを超えた場所性を獲得できるのではないかと思う。

鶴見のある資源を拾い上げながら事物の循環を可視化する



鶴見にある資源や場の使い方は相互に関わりを持っており、地域の中で循環している断片が見えてきた。それらの場所性に伴う事柄を抽出し、鶴見で循環するモノ・コトと連関していくことで就労の場を築いていく。



鶴見に見られる資源の抽出

場所に対する読み解きにより、丘上から丘中を経由して丘下へと資源を抽出していくと資源の分布の規則性が徐々に明らかになってきた。ここでは資源が地形とともにどのように分布しているかをまとめ、資源の分布から地域の特性と丘下と丘上相互での資源の循環を整理していった。

資源マップ

- 鶴見区の資源
- 徒歩インフラ
 - バスルート
 - バス停
 - 森・林
 - 畑
 - 寺社仏閣
 - 学校
 - 駐車場
 - 地域資源
 - 生活資源
 - 労働資源
 - 産業資源

抽出した資源はコンタの上に資源マップとしてプロットしていった。プロットされた資源は類似の特徴を持つ資源同士でグルーピングしていくとまちの構造が明確になってくる。

まちの循環の中から就労について結びつける上で、連関する資源とその資源を取り扱う敷地の選び方、そして資源やそこで働く人がまちに介入していくためのルート選び、またその資源を使って仕事として地域にどのように還元していくのかを読み解いていく必要がある。

この資源マップの作成より連関させる資源と福祉事業所の敷地の選定を行い、そこでこの仕事の内容を決めていった。



資源の分布から敷地と連関するモノを抽出する。福祉事業所は分散型とし、3つの敷地を選定

Site1_園芸・仕分け
連関するモノ
畑・徒歩インフラ・落ち葉
丘上では園芸を行う。育てられた作物は Site2 に運ばれ加工されていく。

Site2_ストック場・加工
連関するモノ
丘上の作物・落ち葉・木材・駐輪所
丘中には丘上で育てられた作物や地域の資源をストックする場所となる。落ち葉や木材は肥料や薪などに変えられ Site1 で活用される。そして一部の作物は加工され、丘下へと運ばれる。またこの場所には幼稚園の送り迎えにきた自転車が集まり自転車もストックされる。

Site3-1_市場・レストラン
連関するモノ
丘上の作物・生活資源・徒歩インフラ
商店街に面した敷地には市場とレストランを計画する。不特定多数の人が集まり、社会性の高い福祉事業所となる。

Site3-2_バス停・直売所
連関するモノ
丘上の作物・バスインフラ・直売所
丘上でとれた作物は丘下へと降りてきて Site3-1 へと運ばれる。それらの作物は分譲としてここへと運ばれ、直売所として商品を並べ地域に消費していく。これまで丘上でとれた作物は丘下の直売所で売られてきた鶴見の循環を引き継いでいく。

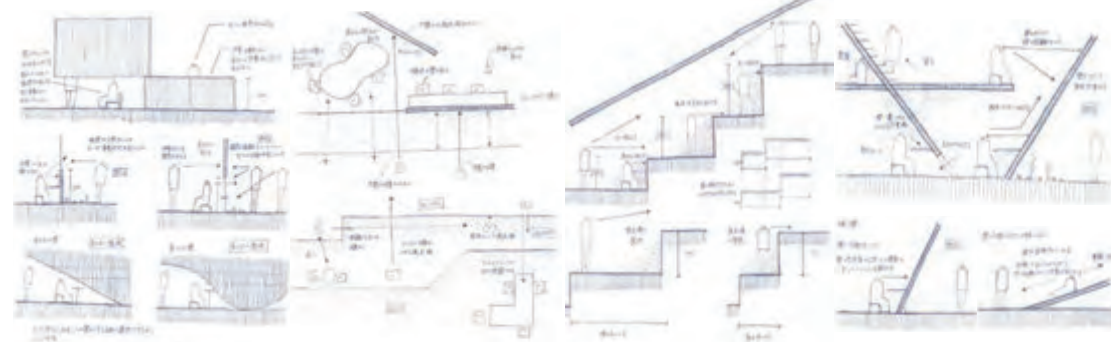
見学ダイアログ

見学での支援員・利用者との対話やそこでの作業風景の観察、そして実際に見たからこそのわかる些細な気づきを福祉事業所における空間に対する設計の手がかりとし、要素を抽出していきながらスケッチとしてまとめ、それをタイポロジー化して整理していった。



異なる視点場

難しさを抱えた人々が同じ作業空間で活動を行っていく上で相互の関わり方を丁寧に解く必要がある。またこれまでの作業空間は壁に対して向きが決まれば他者との関わりを断つよう成立する。ここでは作業空間における視点場に着目する。視線を断つということは彼らにとって作業と休憩の間を示す一方で視点場が異なっていくことで個人空間を獲得しながら相互の関わりを持つ計画を可能にする。

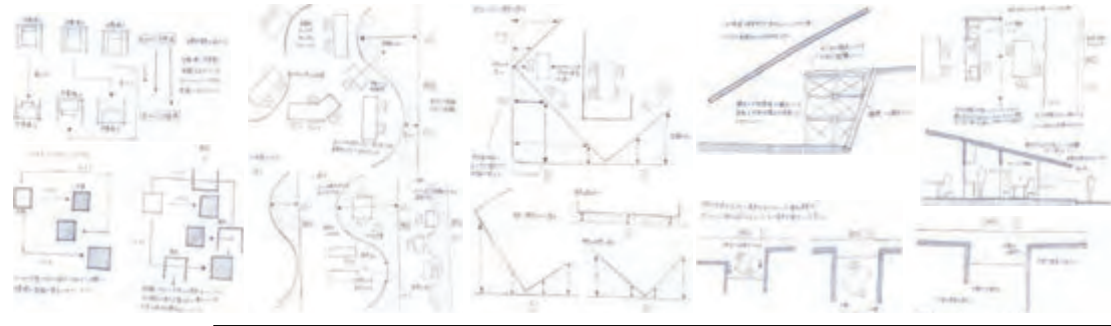


獲得する距離

利用者が社会復帰を目指していく上で距離をすることは重要な訓練の一つであった。距離を獲得することは時事刻々と揺れ動く心情に対し、多数で行う作業に近づくこともできるシミュレーションのように心を落ち着かせることもできる。ここでは距離の操作を行うことで利用者自身が周囲を取り巻く外界に対しての距離感を獲得していくことを考える。

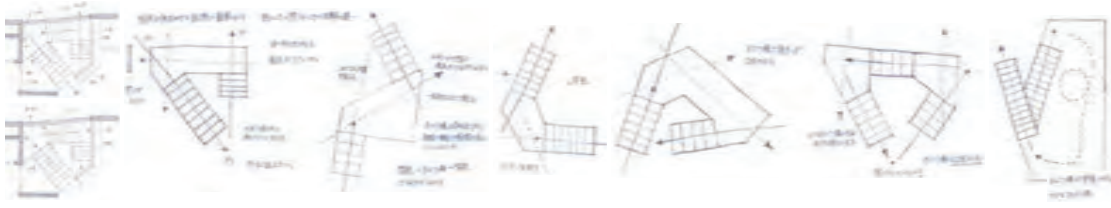
内と外の反転

これまでの施設化した働く場は内側でのふるまいを外部に対して閉鎖してきた。ここでは福祉事業所とその外部に引かれたはっきりとした境界を崩していくことを考える。



身体的記憶に残る階段

福祉事業所での支援員と利用者との対話の中で階段というワードが度々上がる。それは階段の勾配による上りにくさであったり、逆に階段が福祉事業所の中でお気に入りの場所としてあげられたりなど様々だった。そのような経験から階段はそこで過ごす人々にとって身体的な記憶に蓄積される媒体なのではないかと考える。ここでは階段の上り下りの体験の中にある視線の移ろいや体の方向性に注目していきながら移動のためだけではなく階段のふるまいを考える。



まちと福祉事業所

